

福祉系 対人援助職養成の 現場から³⁰

西川 友理

何がどうって説明出来ないけど…

授業で様々なワークをした翌日。学生が私に話しかけてきました。

「先生、昨日の授業、よかったです、またあんなのやりたい！」

そういわれると教員冥利に尽きるというものです。

「そうか、嬉しいです！何がどうよかったです？」

「どうっ…て、うーん…。なんか、よか

った！」

「なんかって何よ、なんかって（笑）」

学生の文章表現の現状

この連載の第4回目（おお、もう6年も前です！）に、学生に正しい文章を書かせることの必要性、という話を書きました。当時、専門職養成校の研究会、実習指導についての学習会、大学教育の勉

強会など、どこに行っても学生の文章表現の稚拙さに関して話題になりました。実習日誌の「てにおは」から指導しないといけないのか、5W1Hはどこに行ったのかという話がよく聞かれました。そして、今もなお、文章力が上がっているとは言えません。

2016年9月に発表された小中高校と専門学校の国語科教員を対象にしたアンケートの結果¹⁾によると、文章指導の重要性について「大変高まっている」との回答が47.6%、「やや高まっている」との回答が39.9%となっており、9割近くの回答者は文章指導が重要と考えていることがわかりました。一方で、文章指導の状況については、「ほとんどできていない」が6.7%、「あまりできていない」が59.0%で、6割以上の教員が指導出来ていないと答えています。

「十分できている」との回答はわずか0.6%であったとのこと。同アンケートでは、困っている事として「文章作成に苦手意識を持つ学生が多い」62.5%「文章指導の時間がとれない」51.4%、また「指導の効果測定の方法がわからない」「文章指導の方法がわからない」などもそれぞれ3割超の回答があったようです。実際に小中高校において、文章指導の必要性は高まっているが、これに対応する指導が十分でないという状況が伺えます。

そして、このような背景を持った人たちが、対人援助職養成校にも入学して来ています。

正しい文章を書くことの大切さ、その為の指導の必要性は6年前も今も変わりません。

ただ、ここ最近、私はまた違ったケースに出会うことが増えてきました。

例えば、科目にもよりますが、私は学期末テストのプリントの最後には大体「〇〇について、あなたの考えを書きなさい」という問題を設定しています。学生は、

「前半の問題の答えはあんまりわからないけど、ここでなんとか挽回しよう！」

「〇〇はよくわかんないけど、とりあえず自分の考えを書いたらええやんな！」と、分からないなりに独自の超理論を展開してくれます。書いてくれてさえいれば、何らかの加点の可能性は生まれます。いわば、ちょっとしたサービス問題のつもりで設定している問題です。

ところがここ1~2年、多くの学生が色々と工夫を凝らして書くそのサービス問題を、白紙で提出する学生が何人か出てきたのです。

「感想文」は書ける。 というより、提出できる。

授業終わりに、学生に、受講内容を踏まえた感想を書いてもらうことがあります。学生は割とすらすら書いて提出してきます。

最近、この感想文について何人かに共通した書き方のパターンに気づくことがありました。

まず「～を初めて聞きました」「～というのを聞いて驚きました」から始まり、「なぜなら～だからです」と続いて

「このような授業を受けられて本当に良かったです」とあり、最後は「ありがとうございました」で終わる、というパターンです。

何というか、読んでいると、こんな事本当はちっとも思っていないでしょう、と問いかけたくなるような気持ちが生まれます。とりあえず出してあげばいいかというような感想文じゃないの、出席としてカウントされるためだけに出しているんじゃないかしら…と、苦い気持ちになりかける一方、

「いや、いかんいかん、学生の感想をきちんと受け止めないと。この感覚は私の勘繰りかもしれない、こういう表現の仕方かもしれない。」

と、反省します。

そこで何かの折に、学生何人かにこういう感想があるのだけど、どういう意図なのかしら、と聞いてみました。

すると彼らは、
「ああ、何も気持ちがかもってないやつですね。」

と言って笑っていました。なんだか、彼らも分かっているようでした。

「こんな文章を書いても、何も気持ちがかもってないって、先生から見てもわかるだろうな…。」

と分かっているながら、とりあえず何かを書いて提出する。これまでの中高生時代に、そのようなパターンを身に着けて過ごしてきたのだと推察されます。彼らが中高生の時に授業を担当した先生方も、このなんとも味気ない文章に気づかなかったわけではないと思います。しかし、「文章指導の時間がとれない」。先述したアンケートの結果が説得力を持って

感じられます。そして結局、それが単なるセオリーとして身につけて、今、養成校にいる彼等です。

「感想・考え」は書けない。 というより、思いつかない。

しかし学生も、さすがにテストでは同じような書き方をしてはいけなく感じるようです。テスト終了後、私にこのように聞いてくる学生もいます。

「先生、『考え』の所が書けなかったんだけど、テスト受かりますか？」

「覚えなきゃいけない部分は覚えていたんだし、『考え』の解答は白紙でも大丈夫ですよ？」

そして確かに、『考え』以外の部分は割としっかり回答してあるのです。

「自分の考え、と言われても……特に何もありませんもん。」

という学生がいます。

「なんか、こう、なんかあるこの感情を、どう文章にしたらいいかわからない。」という学生もいます。

時には、泣いてしまう学生もいます。
「先生、覚えたら答えられるテストにしてくださいよ…書けません、私。」

文章表現における、最近出会った新たなケース、それは「自分の考えが極端に表現できない学生がいる」というものです。

最近の傾向なのか、それともたまたま私が今まで出会わなかっただけなのかはわかりません。

主語述語の繋がりや、5W1H が書け

るといった最低限の文章構成能力があるかどうかに関わらず、また、自分の心がゆり動かされたかどうかに関わらず、自分の考えを文字や言葉で表現することを大変苦手とする学生が、時々現れるようになりました。

ゆとり教育のなかで

今の学生たちが受けてきた教育、いわゆる「ゆとり教育」は今や過去の悪い教育の代名詞のように使われる言葉です。しかし私は、一概に悪いものであったとは言いきれないと思います。

個性を尊重されること、自分の意見を表現すること、それらを重視した教育を受けた彼らの多くは確かに、自分の思いを豊かに表現することができるのです。

しかしその一方で、前述したとおり、極端に自分の思いを表現できない学生が散見されるようになりました。

これは、自分の意見を自由に表現しなさい、という大きな教育方針が「お題目」としてあるにもかかわらず、指導者の意に沿わない意見、授業的に持っていきたい方向、世間で正しいとされている方向を暗黙のうちに指示されてきたということがあったためではないかと思うのです。

学習指導要領がいかに個性を尊重した教育を目指しているにもかかわらず、それを実際に教室で運用するのは先生方です。管理的な教育を長年やってきた先生方に、個性の尊重を目指した教育をしてほしい、と提示しても、それぞれの力量には差があります。

さらには、極端に空気を読むことを求められる教室の中で、あまりにいい子ちゃんらしい意見を言うと、クラスメイトたちの反応が気になります。かといってアウトサイダーすぎる意見を出しても、教室に居づらくなってしまうでしょう。どういう意見ならば、「ほどよい」のか、この判断はなかなか大変です。

指導要領や教科書からは「自由に表現しなさい」、先生からは「管理しやすいように表現してほしい」、友達からは「ほどよく、ほどよくね。分かってるよね？」と…。これらすべてを気にしていたら、自分の思いや考えがあったとしても、それらを表現するのは大変骨が折れる作業になります。

かくして、一部の学生はあらゆる方面からの要求に応じられずに右往左往し、結局自分の意見を言うなどという骨の折れる行為はあきらめ、戦術した「セオリー」に逃げ込みます。

ところが、自分の思いや考えをきちんと把握しそれを表現しないと、どんどん自分の思いや考えを把握するセンサーが衰えます。一番傷つかない答え方は、無難な、誰の敵にも味方にもならない答え。

そしてやがて、自分の思いや考えを把握するセンサーが鈍くなったまま、ただ言われたことを言われた通りに行う方が楽、というメンタリティが育ってしまうのかもしれない。

特にそれまでの人生で、習い事や地域の活動など、多様な学びの機会を持ってこなかった学生、どちらかというと生活経験の乏しい学生に、時々そんな傾向がみられるように思います。「自分の思い

通りに表現していい」という場を保障される機会の少なさ、さらには自分の中にある考えを形づくる為の材料そのもの（知識や経験、多様な価値観と出会う事など）の少なさなどが要因かもしれません。

思いや考えを表現する大切さ

自分の思いや考えを文字や言葉で表現する。その表現されたものに最初に触れるのは、自分です。自分の目で見て、耳で聞いて、「自分の考え」を知ります。

このような言い回しを見聞きしたことはないでしょうか。

「私、そこにいたAさんが見えてなかったんです…いや、見ないようにしようと思って、わざと目を向けなかったんです。」

つまり、自分で言葉にしたことで、自らのその言葉を聞き、違和感に気づき、言いなおす、というようなことです。口に出して初めて、あるいは文章にして初めて、自分の考えを明確に把握することが出来ます。

対人援助職には、このように、自分の思いや考えを把握する機会が必要だと思っています。なぜなら、対人援助を行う時のメインの仕事道具は「私自身」だからです。仕事道具の特性や傾向を把握し、時に生じる歪みやズレに気づき、それを調整しておかないと、その道具は使えないのではないのでしょうか。

自分の思いや考えを適切にモニタリングするためにも、話すなり書くなり、何らかの形で表現する力が必要です。そ

うすることで、自分の支援のあり方を見直すきっかけにするのです。

それぞれの工夫

そういうわけで学生を指導する立場にある人達は、学生が自らの考えを表現できるような工夫を色々と考えます。

ある保育園の園長先生と話していた時、実習生について、こんなことをおっしゃっていました。

「反省会で『何か質問ある？』って聞いても、たいていの実習生さんは『ないです』って答えるんです。ですから最近、問い方を変えてみました。」

「へえ、どんなふうにですか？」

「『今日一日の中で困った事やしんどかった事がありましたか？』って聞くんです。そうすれば、大体何らかの答えが返ってきます。そこから話題をほぐしていくのです。」

確かに、実習中は困ることだらけです。そこをつつくと、学生は「そういえば…」と思いつくとのこと。

また、困った事やしんどかった事という、どちらかといえばマイナス面について、話していい場であるというメッセージになっているところに大きな意味があるように感じます。

授業中に実施したワークについて学生に感想を書いてもらう時に、私も少し工夫をします。例えば、単に感想を書きなさい、とするのではなく、

「今回勉強になった事を2つ書きなさい」

い。それぞれなぜ勉強になったと思ったか、理由を書きましょう」

「ワークの中で、よかった事と、あまり良くなかったなと思う事を2つ書きなさい。それぞれなぜそう思ったか理由を書きましょう」

という質問にします。2つではなく、3つにする時もあります。多くの学生は1つだけならサラッと書くのですが、2つ目、3つ目となると「ええっと、他に何があったかな…」と考えを深めざるを得ないからです。

そして集まった解答のうち、めぼしいものを(40名くらいまでなら全員分を)、だれがどの回答をしたのかわからない形でパソコンに打ち込んでデータにし、学生に再度プリントにして配布します。

(公表してほしくない学生の分はまとめません。それは事前に申告するように伝えてあります。)

学生は、このプリントをととても読みたがります。皆がどんな考えなのか、気になるようです。

このプリントをもとに再度、考えを深めてもらいます。するとプリントの内容に刺激されるのか、さらに深い意見が出て来るのです。こうすると、普段はセオリー通りに書く学生も、セオリーから外れた思いや考えを書くことが多くなります。

これらのケースを見ればわかるように、学生には、思いや感情、考えがないわけではありません。何らかの方向から刺激をすると、きちんとレスポンスが返ってくるのです。あとはそれを口語なり、文章なりで表現するだけです。

学生からそれぞれの思いや考えを引き出す為の工夫について、私は2つのポイントがあると考えています。

思いを否定しない

1つ目は、学生の心に浮かび、目の前の私に発せられる「思い」を、否定せず受け止めるという事です。

対人援助系の授業、特に自分自身を見つめるワークでは、私はこのような話をします。

「好きな女の子に彼氏がいても、好きになったという気持ちは否定できないでしょう。2次元のキャラクターだって分かっていても、アニメのキャラクターにときめいたりするじゃないですか。むかつく奴がいて殺してやりたいと思っても、実際に殺すかどうかはまた別ですしね。」

「『思い』は空から降ってくるような、自然に湧き出すようなものだから、否定しようがないです。」

「だから、まずは自分がどんな思いを持っているのかをきちんと見てみましょう。」

学生の話聞く時にも、私は基本的にこの姿勢を貫くことを大切にしています。

具体的には

「授業では、虐待は駄目って言うけれど…子どもを叩くことの、何が悪いかわからない。」

「前から、知的障害の人が歩いてきたら、なんか怖い、緊張する。」

「A先生が、どうしても嫌い。むかつ

く。」

こんな意見に対して、「仮にも対人援助を学んでる人がそんなことを言っただメよ」等と、言っただいけないと考ています。

あるいは、

「授業で私語する子が嫌い。ちゃんと授業を聞きたい。」

「困っている人をほっておくのがつらい。私で何とかできることなら、助けたと思う。」

「本当は真面目な話がしたい。でもそんなの、友達に言ったら絶対に笑われる。」こんな意見に対して、茶化しつつ褒めるということも、したくないと思うのです。

どんな思いに対しても、

「おお！そうなんですね。それはどういこと？もっと教えて！」

と、ただ純粋に、その発言の意味は何か、その学生の思いはどういうものなのか、興味を持つという態度でいることが大切だと思ひます。

どんな意見を表現しても攻撃されない、むしろ興味を持たれる、とわかってくると、そのうち、学生は少しずつ、自分の思いや考えを表現し始めます。徐々に自分自身のお腹の中や心の底から、生まれて出てくるような純粋な思いや考えを大切に扱ふ態度が涵養されます。その時こそ初めて、「この私の思いや考えと、これからどう付き合っていこうかしら」と自ら向き合ひ、考えるタイミングだと思ひます。

そのうちに、自分以外の人のおひや考えも同じように尊重する姿勢が生まれます。多様な人間と関わる対人援助職になるにあたり、大変重要な態度です。

多様な意見や考え、体験に触れられるような配慮をする

もう一つは、学生が、出来るだけ多様な意見や考え、体験に触れられるようにする、ということです。

自分の考えを作るための材料を頭の中に集めるのです。経験が少ないのなら、経験を増やすのです。

過去の偉人の考えや言葉、法律や制度、現在の社会状況などを勉強することはもちろん材料になります。特別偉人でなくても、様々な経験をしてきた人とコミュニケーションをとり、自分とは違う考え方に触れることも大切です。

前述した皆の感想をまとめたプリントは、学生にとっても人気があります。自分が知っているもの、関わったものに対するクラスメイトの意見は、気付きを得るきっかけになり、新たな発見につながるようです。

コピーライターの糸井重里さんが以前、「借りものの考えや、借りてる考えの又貸しなんか、激しく飛び交っているような時期に、『できるかぎり』のやり方で、あたまのなかを調べて、小さな『じぶんの考え』が見つかったらいいなと思う。」と書いていらっしやいました。

(2)

借り物の考え、又貸しの考え、どこかで聞いた誰かの言葉…頭の中に様々な人の考えを取り入れる経験をすること。これが物事に対する小さな『じぶんの考

え』を形成する時のきっかけになり、材料になるのです。

実習4日目のAさん

Aさんは児童養護施設での宿泊実習2日目。早くもストレスがピークに達していました。何がしんどいかわからない。しかし、何かがしんどい。

「まあ実習ってしんどいもんやしな…そういうもん、そういうもん。納得しなきゃ。でも、とりあえずこの気持ちをなんとかしたいな…。」

友達にLINEや電話をして泣きつくという手も考えられましたが、その手は取りませんでした。そもそも実習内容についてデータのやり取りをする事は学校から禁じられていましたし、実習は1学年で同時期に実施されていきましたから、自分と同じように実習で苦しい思いをしているかもしれない友人に、どうしても頼る気にはなれなかったのです。

Aさんは、1日の実習が終わって実習生室(実習生が実習期間中寝泊まりする部屋)に戻ると、実習記録などのやるべきことを済ませた後は、スマートフォンを使い、YouTubeで好きなアーティストの動画を見まくったり、インスタグラムの写真をたくさん閲覧したりして、気を紛らわせていました。

ところが、運の悪い事に、実習期間は月の後半でした。実習4日目、データ使用量の制限にひっかかり、スマートフォンのデータ使用に速度制限がかかってしまったのです。YouTubeの動画は一切見ることが出来ません。インスタグラム

の画像も表示されません。

気分転換に外出するには、職員に声をかけ、部屋の鍵を預けなければなりません。外が暗くなってから女性が一人で外出することに対して、職員からどう思われるかしらと考えると、それもおっくうでした。実習生室にはテレビもありませんでした。

実習期間はあと6日もあります。実習最終日は31日。これから半分以上残っている実習期間を、Youtubeもインスタグラムもなしで、過ごさなければなりません。

どうしよう、どうしよう、ああ、もう！と切羽詰まった時、ふと、授業で習った「思っている事を言語化する大切さ」を思い出したとの事。

「そうや…日記、書こう。」

Aさんはノートを広げ、ペンをとり、まずは「しんどい！」と書きました。それから書いて書いて、書きました。主語述語の整理など関係なく、文字の美しさなど気にせず、とにかく思っている事を全て書きました。

子どもの洗濯の間を見計らって、ホームの洗濯機を使わせていただくという事。普段長風呂のAさんにとって、短く決められている入浴時間。実習生室のドアを一枚隔てたところに、子ども達がいる生活…。

「…そうか。私、こういう事がしんどい人なんや。」

宿泊実習中は、プライベートな空間と時間がどうしても確保しきれない、ということにしんどさを感じている自分がいることに、Aさんはこの時初めて気づきました。

すると、気持ちの奥底が、すうっと落ち着いてくる自分に気づきました。

自分の心が わからなくならないように

5W1Hがわかる文章が書けないとか、主語述語が通っていない文章しか書けないという事は確かに問題ですが、言葉に出来ない事によって一番怖いのは、自分の心や意志の声がわからなくなる事です。

もちろん、自分の思いや考えを全て言葉にすることは難しいですし、それをすべて把握している人がいるとは思いません。しかし、自分の思いや考えをないがしろにしすぎて、自分の思いや考えを把握するセンサーが鈍くなってしまうと、自分の人生を主体的に生きにくくなるのではないのでしょうか。そのセンサーの感度を保つためにも、言葉にすることは大切だと思うのです。

私は養成校教員として、学生の思いを否定せず、考えを形成するための多様な材料は提供しますが、私の目に触れる文章は、所詮「先生に見せるための文章」ですので、おそらく学生が自分の思いを全て書くには心のフィルターがかかってしまう可能性は高いでしょう。

まずは「なんか良い」「なんか嫌」でいいので、正直に感じる自分の気持ちを十分感じ、その正体を言葉や文章に表現することで、自分の心のありかを見つけることを、学生に勧めています。

これを繰り返すことで自分の思いや

考えを把握し、より深めることが出来るようになります。また、その考えをもとに、専門職としての視野を広げていけるようにもなると思うのです。

実習5日目のAさん

ノートを書いた翌朝、早く起きたAさん。出勤するまでにはまだ時間がありました。

ノートを取り出し、「5日目の朝」と書きました。それからまた、心に浮かんでくる事をどんどん書き記しました。しんどい、つらい…という記述をどんどん書いているうちに、まただんだん心が落ち着いてきます。

やがて、自分が書いた文章に、はっと驚きました。「子どもはかわいいし、職員さんは親切に色々教えてくださる。いい実習をしていると思う。こんな施設で働きたい。」と、ノートにはありました。

「…なんやこれ！」

「しんどい事を書こうと思っていたのに、気付けばこんな事を書いていた。」

「…でも確かに、そうやわ。そう思っているわ、私。」

「しんどさは自分の物事の捉え方にあったのか。今私、とてもいい環境で実習させていただいているんだ。」

「…という事があったんですよ、今朝。」

と言って笑っているAさん。実習5日目のお昼、私が実習先に巡回指導に訪れた際に語ってくれた物語です。

「昨夜、ノートを書くまでは、先生が巡

回指導にいらっしやったら、きっと泣きついてしまうと思っていました。でも、今は全然平気です。」

「気持ちを整理するために、文章にすることで大きな意味があるんですね。凄いですねえ。」

若干20歳でその気づきを得たAさんが、私はとても羨ましく感じました。

「それから、残りの実習期間を使って、とにかく知りたいことがたくさんあるって事にも、気付いたんです。」

「何か今、いっぱい勉強したいんですよ！残りの実習も、それからその後も、頑張ります、私。」

その笑顔を見ていると、こちらのほうが元気になってくるのでした。ありがとう、Aさん。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

参考文献

1) 「文章指導は重要なのにできていない 6割超の国語科教員ら 苦手な生徒多いが時間ない」教育新聞 2016年9月22日

2) 「今日のダーリン」2016年7月10日 ほぼ日刊イトイ新聞

<http://www.1101.com/home.html>

(…ですが、「今日のダーリン」のバックナンバーは読めません。悪しからず。面白いなあと思ったものを、メモに残していたものを使用しました。)